

# 価値形態論で解明すべきこと

——岩井克人『貨幣論』批判——

鈴木 敏 紀\*

(平成6年10月31日受理)

## 要 旨

マルクスは『資本論』において価値形態論を展開し、貨幣の必然性を論証したのであるが、それを論証するための価値形態論においては、マルクスにとっては商品の価値実体としての抽象的人間労働という人間労働一般の概念が不可欠のカギであり、基底概念であった。

これに対し岩井克人はその著『貨幣論』において、マルクスの価値形態論に従いつつ貨幣の必然性の論理を吟味して、そこには抽象的人間労働の概念は不要であるとしている。そして、彼は最終的にマルクス経済学における労働価値論を葬りさるのである。

マルクスの価値形態論の特徴は、商品の価値実体とその表現形態との弁証法の上向法による論理展開によって“貨幣生成”の必然性を論証するところの“文質彬彬”にあるのであるが、岩井のそれは、価値実体を抜きにした形態並列の「宙づり」的循環論法による“貨幣存在”の論証にある。両者の貨幣論証は中身も方法も異なるのである。

さらに、岩井の論証法は、マルクスの論証法とはまったく異質なものであり、科学的論証法とは決して言えないものなのである。にもかかわらず、岩井はその「宙づり」的循環論法こそが貨幣の謎にせまる唯一の方法であるとして、マルクスの彬彬なる弁証法的価値形態論を骨抜きにしよう。

岩井は、マルクスの価値形態論に沿った形をとって岩井流循環論法を展開し、最終的に労働価値論を葬りさっているために、その方法は一見、マルクスの価値形態論に対する内在的な批判のように見えるが、岩井の価値形態の論理はマルクスのそれと似て非なるものなのである。岩井の論理には、まったく形態の移行の弁証法的論理はなく、単にマルクスが弁証法の上向法の論理を駆使して展開した価値形態をなんの脈絡もなく並列に並べ、それら異なる価値形態を相互に前提しあうという岩井流「宙づり」的循環論法を繰り返す。その論法の結末において、岩井は突如として外部から貨幣を導入し、貨幣とは「無から有が生まれたモノ」と宣言して、労働価値論を葬りさったのである。

## KEY WORDS

form of value	価値形態	労働価値	value of labour
money	貨幣	循環論法	circular argument
abstract human labour	抽象的人間労働	弁証法	dialectic

\* 社会系教育講座

## 1. はじめに

マルクスは『資本論』第1巻「資本の生産過程」第1編「商品と貨幣」第1章「商品」第3節「価値形態または交換価値」において商品の価値形態を展開するにあたって、「ここでは、いまだかつてブルジョア経済学によって試みられたことのない一事をなしとげようとしているのである。すなわち、この貨幣形態の発生を証明するということ、したがって、商品の価値関係に含まれている価値表現が、どうして最も単純な最も目立たぬ態容から、そのきらきらした貨幣形態に発展して行ったかを追求することである。」(1)と述べているように、価値形態論では商品の価値関係から貨幣が必然的に発生する論理的メカニズムを明らかにすることにあると言っている。したがって、われわれはいまこのマルクスの貨幣必然性の論理を検討するのであるが、その際、このマルクスの論理に異を唱えている岩井克人の『貨幣論』(2)における第1章「価値形態論」とともに検討するものである。

岩井は、労働価値論を前提とした価値形態論において「最後に捨てられるのは労働価値論である。」(3)と述べ、マルクス経済学の真髄を葬りさるのである。果たして価値形態論は労働価値論を捨てられなければならないものなのだろうか。岩井は、「マルクスは『労働価値論』の自明性を古典派にもまして徹底的に信じていたからこそ、『価値形態論』なるものを展開したのである。」(4)と述べ、価値実体としての抽象的人間労働の概念を宗教的信仰の問題であるかのごとく言い回した後、「『労働価値論』によって可能性が開かれたマルクスの『価値形態論』が、まさにその展開の過程のなかで『労働価値論』そのものを転覆させてしまう論理構造をうみだしてしまうという逆説」(5)を論証しようというのである。

岩井の価値形態論は果たしてマルクスの価値形態論における労働価値論を葬りさられるのであろうか。これが本論文のテーマである。

## 2. 抽象的人間労働の概念は科学か信仰か？

マルクスは商品の価値実体として抽象的人間労働の概念を創造する。すなわち裁縫も機織りも質的に異なった具体的で有用な労働であるが、両者とも「人間の頭脳、筋肉、神経、手等々の生産的支出」であって、「生理学的意味における人間労働力の支出」であり、「人間労働一般」の支出であり、「この同一の人間労働または抽象的に人間的な労働の属性において、労働は価値を形成する。」(6)と、マルクスは労働価値論の普遍性を述べているのである。

ところで「価値」とは人間労働によって形成されるものであるから、それは労働生産物のことである。マルクスは「価値」について念を入れて「流動状態にある人間労働力、すなわち人間労働は、価値を形成するのであるが、価値ではない。それは凝結した状態で、すなわち、対象的な形態で価値とする。」(7)と述べており、この「人間労働の凝結物」が「価値」であるというのであるから、「価値」とは人間が形成した「労働生産物」にはかならない。

全ての商品が価値を有するのは、全ての商品が人間の形成した労働生産物から成り立っていることを意味する。人間の全く関与しないものは労働生産物たりえず、したがって価値物ではない。空気は人間のみならず万物にとって不可欠に有用な使用価値を有するが、価値物ではな

い。したがって「労働価値論」とは、労働生産物の商品への転化という特殊歴史的な社会経済的關係を前提とした経済学体系の一表現であるのであって、その前提は信仰の問題ではなく、否定のできない科学的前提である。信仰は「ない」ものをあたかも「ある」かのごとく思い込むことであるが、労働価値、すなわち抽象的人間労働の凝結物、すなわち労働生産物の概念は「ない」ものをあたかも「ある」かのごとく思い込んで概念化したものではない。具体的、感覚的に把握されうる「ある」ものを抽象化し、概念化したもので、まさに科学性をもった概念である。だからこの前提を無視した近代経済学体系があるからといって、何も否定されるいわれもなければ、「捨てられる」いわれもないのである。

問題は、労働価値論で経済学体系が無矛盾的に論理が展開されているかどうかということであろう。ここでは価値形態論が労働価値論を前提として無矛盾的に展開可能かということである。岩井は、マルクスの価値形態論は前提であるべき労働価値論が、その終末において捨てられるべきものとしているのであるが、果たしてそうなのか、岩井の論理とマルクスの論理を重ね合わせて吟味してみよう。

### 3. 「単純な価値形態」でのマルクスの論理と岩井の論理

20エレのリンネル＝1着の上着

(20エレのリンネルは1着の上着に値する。)

この二つの商品は等号で結ばれているが、この等式は何を言い表そうとしているのであろうか。

本来、商品世界は貨幣によって価値表現され、売買されて存在する価格体系の世界である。したがって、

20エレのリンネル＝1ポンド

1着の上着＝1ポンド

ゆえに、20エレのリンネル＝1着の上着

異質の使用価値を有する二つの商品が等号で結ばれる根拠のひとつに貨幣による数量表現が一致していることにあるのであるが、その量的表現を可能とさせているものに二つの同等性としての価値保有性、すなわち価値実体としての抽象的人間労働が存在しているからである。このことをマルクスは、「人は、異種の物の大きさが、同一単位に約元されて後に、初めて量的に比較しうるものとなるということを忘れている。同一単位の表現としてのみ、これらの商品は、同分母の、したがって通約しうる大きさであるのである。」(8)と述べ、そこで「同一単位での約元」、「同分母での通約」と言っているのは、究極的には価値実体としての抽象的人間労働のことである。すなわち「上着を縫う裁縫は、リンネルを織る機織りとはちがった具体的な労働であるが、しかしながら、機織りに等しいとおかれるということは、裁縫を、実際に両労働にあたって現実に同一なるものに、すなわち、両労働の共通な人間労働という性質に整約するのである。」(9)と述べているように、徹底して異種の商品における共通項として価値及び価値実体としての抽象的人間労働が指定されているのである。

したがって、この等式は当然、1着の上着＝20エレのリンネル、と置き替えても差し支えないものであると、マルクスは次のように述べている。「むろん、リンネル20エレ＝上着1着、ま

たは20エレのリンネルは1着の上着に値するという表現は、上着1着＝リンネル20エレ、または1着の上着は20エレのリンネルに値するという逆関係をも含んでいる。」(10)と。

この等式に潜む価値概念をしっかりと押さえた上で、この等式それ自体の表現内容を吟味することが価値形態論であるのである。価値形態とは価値量の表現形式のことであり、したがって異質の商品の交換比率の等式であり、交換価値の表現形式であり、単純に言い替えれば交換価値式である。

したがって、上記の等式は、20エレのリンネルの交換価値は一着の上着に等しい、または20エレのリンネルの価値量は1着の価値量と交換が可能である、と読まれるのである。この等式において左辺に位置するリンネルの価値量は右辺に位置する上着によって表現されているから、マルクスは左辺に位置する商品を相対的価値形態にある商品と呼び、右辺にある商品を等価形態にある商品、そして直接交換可能性のある商品と呼んでいる。

リンネルが相対的価値形態にあるということは、リンネルという商品が自分の価値量を表すためにその材料として上着を定置したからであり、リンネルの価値量は上着の価値量によって測られているからである。上着が等価形態または直接交換可能性にあるというのは、上着がリンネルの価値基準、すなわち物差しとしての材料として定置され、さらに媒介のない、すなわちいわゆる貨幣の介在しない関係で交換比率を表されているからである。

この関係をマルクスは一般化して「商品Aが商品Bを価値体として、すなわち、人間労働の体化物として、これに関係することにより、商品Aは、使用価値Bをそれ自身の価値表現の材料とするのである。商品Aの価値は、このように商品Bの使用価値に表現されて、相対的価値の形態を得るのである。」(11)と述べ、等価形態及び直接交換可能性については「商品A(リンネル)が、その価値を異種の商品B(上着)という使用価値に表現することによって、Aなる商品はBなる商品自身に対して独特の価値形態、すなわち、等価の形態を押し付ける——。このようにしてリンネルは自分自身価値であることを、実際には、上着が直接に自分と交換し得るものであるということをつうじて、表現するのである。一商品の等価形態は、それゆえに、この商品の他の商品に対する直接的な交換可能性の形態である。」(12)と述べている。

この「単純な価値形態」において明白なことは、二つの商品の同等性は抽象的人間労働にあり、したがってそれは価値体であり、労働生産物ということが大前提にあり、その上で相対的価値形態に立つ商品がその主体性において他の商品を等価形態または直接的交換可能性の位置に立たせているということである。したがって等価形態の商品はあくまでも相対的価値形態の客体であり物差しとしての価値基準であり、かつ直接的に交換可能な商品であるということである。マルクスが、「一切の価値形態の秘密は、この単純なる価値形態の中にかくされている。」(13)と述べているのはまさにこのことなのである。すなわちこの「単純な価値形態」における等価形態にある商品について、マルクスは次のような比喻で説明している。

「一つの砂糖塊は、物体であるから重い。したがって重量を持っている。しかしながら、人は砂糖塊をなでてもさすっても、その重量を見つけることはできない。そこでわれわれは、あらかじめ重量の定められている種々なる鉄片を取り出すのである。鉄の物体形態も、砂糖塊のそれも、それだけを見れば、ともに重さの現象形態ではない。だが、砂糖塊を重さとして表現するためには、われわれは、これを鉄との重量関係におく。この関係において鉄は、重さ以外の何ものをも示さない一物体となっている。したがって、鉄量は砂糖の重量尺度として用いられ、砂糖塊に対して単なる重量態容、すなわち、重さの現象形態を代表する。鉄がこの役割を

演ずるのは、ただこの関係の内部においてのみであって、この関係の内部で、砂糖は、あるいは重量を測ろうという他のどんな物体でも、鉄と相対するのである。両物が重さを持っていないければ、これらの物は、この関係に入りえないであろうし、したがって、一物は他物の重量として役立つことはできないであろう。」(14)と。

この砂糖塊と鉄片との重量関係を価値関係に置き替えて言い替えることもできるのである。鉄片は砂糖塊の価値表現手段として自然形態のまま、すなわち使用価値の姿のまま定置されているのであるが、鉄片は価値を表現しているものではない。しかし鉄片が価値の表現手段、すなわち価値尺度として定置されるのは、その鉄片が価値をその内部に持っているからである。すなわち砂糖塊も鉄片もともに人間労働の形成物であり、したがって価値体である。価値体でないものが価値尺度たりえないということである。

この単純で明解な価値形態をさらに現実の貨幣形態に当てはめてみれば明らかなように、貨幣は商品価値の交換比率を表す物差しであって、すなわち価値尺度である。そしてそれはまた直接交換可能な形態にある存在である。そしてまた貨幣が価値尺度たりうるのは、それが人間の労働が加わり形成された価値体であり、労働生産物であるからである。価値体でない、したがって人間の労働が加わっていない貨幣がこの世に存在したことがあるだろうか。その貨幣が紙切れであろうと、貝殻であろうと、石ころであろうと、である。

しかしここで先走りをして高度に発展した貨幣形態や特殊な歴史的文化的な生活様式のもとの貨幣形態を論じて問題を混乱させてはいけない。ここでは「単純な価値形態」で否定できない明らかな価値及び価値実体を押さえておけばよいのである。価値形態論での問題は、マルクスが言うように、なぜ、どのようにして等価形態に立つ商品に貨幣と呼ばれる商品が定置されるのかということである。

しかし、岩井はこの否定しがたいこの真理に否定的な疑問を次のように投げ掛けているのである。

「なぜならば、等価形態にある上着は、そのあるがままの姿でリンネルとの直接的な交換可能性をもつことになり、あたかもそれじたいで価値をもっているような錯覚をうみだしてしまうからである。金銀そのものに価値があるから金銀はありとあらゆるものを手にいれられるのだと重金主義者がいうように、上着そのものが価値をもっているからリンネルという商品と直接に交換できるのだというふうに。たしかに、上着がリンネルと直接に交換可能なのは、リンネルがじふんとの直接的な交換可能性を上着にあたえているという社会的関係の結果にすぎない。しかしモノの性質とはモノそのものに内在しているという日常生活に根ざしたひとひとの先入観によって、上着もリンネルとの直接的な交換可能性を、重さがあるとか保温に役立つとかいう性質と同様に、うまれながらにもっているように錯覚されてしまうのだとマルクスはいう。」(15)と、あたかもマルクスが言っているかのように、等価形態の商品価値の実体について否定している。

異質な二つの商品が等値されているのは、それらが同等の性質を持っているからである。岩井は自分自身がマルクスを引用して述べていることを理解していない。すなわち岩井は、「人間は最初はまずほかの人間のなかにじぶんを映してみるのである。人間ペテロは、かれと同等なものとして人間パウロに関係することによって、はじめて人間としてじぶん自身に関係するのである。」(16)とマルクスが注で述べていることを引用しているのであるが、岩井は全くこの意味を理解していないということである。人間は“犬”や“猫”のなかに自分を映しては見ない。

人間ペテロも「人間」パウロに関係するのであって、「猛獣」と関係して自分を見ているのではない。両者の「人間」としての同等性が重要なのである。

このマルクスの注は、商品 A と商品 B との同等性における価値関係を人間関係に置き替えて比喩的に言い表したものである。それら商品の同等性は、いうまでもなく「価値体」であり、「人間労働の体化物」であるとマルクスは言っているのである(17)。

このようにマルクスは、「価値体」及び「価値実体」を商品の共通性、同等性として措定しているのであるが、それが、岩井の手にかかると、マルクスがあたかも自ら否定しているかのようにして否定してしまう。岩井は、マルクスの論理に従って論理を進めているような振りを示しながら、その実は全く異質な論理を展開していることが分かる。それは次の言葉の意味においてもそうである。

岩井は、「社会的な関係とモノそのもの(または人間自体)の性質との『とりちがえ (quid pro quo)』——この『とりちがえ』をうみだす等価形態の不可解さ」(18)と言って、「quid pro quo」の意味を「ない」ものを「ある」かのように錯覚をおこした「とりちがえ」と解釈しているのであるが、マルクスが“quid pro quo”(向坂訳では「混同」)と言っているところは、「商品の自然形態が価値形態となる。しかしながら、注意すべきことは、この quid pro quo は、云々」(19)とあるように、商品が使用価値の自然形態のまま等価形態という価値形態となっていることであり、そうした現象が起きるのは、「商品 B (上着) にとっては、ただ他の適宜な商品 A (リンネル) が自分に対してとる価値関係の内部においてのみ、すなわち、この関連の内部においてのみ、起こることなのである。」(20)ということであるから、商品 A と商品 B との価値関係の内部、したがってこの二つの商品の価値と使用価値との関係において、商品 A が自己の価値を表現するために商品 B をその表現手段として等価形態に立たせたのであり、商品 B は自然形態である使用価値のまま商品 A の価値を表現しているのであって、等価形態の商品 B が自分の価値を自分の使用価値で表現していることでも、商品 A によって価値表現されているものでもないということなのである。このことを「ペイリをその先行者や後継者の多くとともに誤り導いて、価値表現において、ただ量的な関係関係だけを見るようにしてしまった。」(21)のであり、彼等は、相対的価値形態の量的規定性とは異なり、「一商品の等価形態は、むしろなんらの量的価値規定をも含んでいない」(22)ということを理解せず、等価形態の商品 B も同時に価値表現しているものと“quid pro quo”しているというのである。まさにこの“quid pro quo”とは、ブルジョア経済学者の「とりちがえ」であり、「混同」「誤謬」なのである。

商品の価値と使用価値の表現様式、換言すれば、排他的な対立関係が成立している「価値形態」という「価値方程式」(23)は等価形態の特性を理解して初めて解ける問題なのである、とマルクスは言うのである。すなわち「等価形態の考察に際して目立つ第一の特性はこのことである。すなわち、使用価値がその反対物の現象形態、すなわち価値の現象形態となるということである。」(24)とマルクスが明白に言っているように、商品の価値は、その商品によって等価形態に定置された他の商品の自然形態(現象形態)である使用価値で表現されざるを得ず、したがって等価形態にたっている商品は何ら価値表現もしておらず、「何らの量的価値規定をも含んでいないのである。」(25)ということなのである。

等価形態に立つ商品(上着)が自己の価値を表現しようとすれば、相対的価値形態に立たなければならず、他の商品、例えばリンネルを等価形態に持ってこなければならぬのである。マルクスがこの価値表現様式の特異性においてブルジョア経済学者が“quid pro quo”していると

言っているのであって、それを「ない」ものをあたかも「ある」かのように錯覚した「とりちがえ」などとマルクスの言質を取り違えてはいけない。さらにこのことについて先にも引用したように、マルクスは砂糖塊と鉄片との重量関係の比喩で説明していることから明白である。

また岩井が、マルクスが言っているとして取り上げた「錯覚」のところであるが、そこでマルクスが言っているのは、等価形態に立つ商品が直接的交換可能性にあるのは相対的価値形態に立つ商品によって与えられた社会的関係によるものであるが、それが「天然の属性」のように「見える」<sup>29</sup>ということ、それはブルジョア経済学者の「錯覚」でしかないのである。マルクスが、「彼は、リンネル20エレ＝上着1着」というような最も簡単な価値表現が、すでに等価形態の謎を解くように与えられていることを想像しても見ないのである。<sup>30</sup>と述べているように、社会的属性を自然的属性と「錯覚」しているのはブルジョア経済学者である、と言っているのである。

このことに関連してマルクスが比喩として上げた王と臣下との関係である。「この人間が、例えば王であるのは、ただ他の人間が彼に対して臣下として相対するからである。彼等は、逆に彼が王だから、自分たちが臣下でなければならぬと信じている。」<sup>31</sup>ということを商品の価値形態に翻訳すれば、「王」とは等価形態の商品 B であり、「臣下」とは相対的価値形態の商品 A である。だから商品 B が等価形態に立っているのは、商品 A によってであって、商品 B がそれ自身の天然の属性として等価形態に立っているのではない。それは商品 A による社会的行為によってそうなっているに過ぎないのである。しかし、そうした社会的関係があたかも自然的属性であるかのように、すなわち商品 B が生まれながらに価値尺度として等価形態に立っているものとして商品 A が相対的価値形態に立って自己の価値を表現している、と考えているとしたら、まさにそれが“quid pro quo”なのである。

岩井は、このマルクスの比喩について、等価形態に立つ商品 B には価値実体など「ない」のに、あたかも「ある」と「錯覚」しているのだと、マルクスは言おうとしているのだと解釈しているが、マルクスをどのように解釈しても、そのような解釈は絶対に成り立たない。いったい誰が「錯覚」を起こしているのか？岩井の我田引水もはなはだしいものである。

したがって、この単純な価値形態において、リンネルが上着を等価形態に立てているのは、それが上着の「自然的属性」であると「錯覚」されたからではなく、リンネルの主体性における社会的関係によって、上着が直接的交換可能性を与えられたのである。またその等価関係の根拠は、人間労働一般による両者の同等な価値体にあるのであって、リンネルが「錯覚」を起こして、上着が生来的等価形態にあるから自己の価値をそれで表現している、という関係ではないのである。両者は同等の価値体として関係しているのであり、それは自然的属性によるものではなく、社会的関係によるものであって、「ない」ものをあたかも「ある」かのように「錯覚」した関係なのではない。「錯覚」の主体は岩井なのである。

リンネルはその価値を上着の現象形態である使用価値で表現しているということであり、上着は価値体ではあるが、その使用価値でリンネルの価値を尺度しているのである。ここでは上着の価値は何ら表現されてはいないのであり、両者の立場には明白な違いがあるのだ、ということである。「等価形態の謎」とは、商品の価値が他の商品の使用価値で測られるという諸商品の社会的価値関係が、「ブルジョア経済学者には理解できない」ということを言い表した言葉でしかなく、マルクスがそれを論理的に「価値形態論」として明らかにしたのである。

「単純な価値形態」の本質が以上のように理解され、諸商品の価値関係の「謎」が解明され

れば、貨幣形態の謎も容易に解けるのであるが、岩井にとっては全く理解されえないために、さらに「全体的な価値形態」へとその「謎」解きに進まなければならないのである。

#### 4. 「全体的な価値形態」におけるマルクスの論理と岩井の論理

マルクスは、単純な価値形態は不十分な形態であるという。その不十分性とは、単純な価値形態においては「なんらかの一商品 B における表現は、商品 A の価値をただそれ自身の使用価値から区別するのみであって、したがって、この商品をただそれ自身と異なった個々の商品種の何かに対する交換関係におくのみであって、他の一切の商品との質的等一性と量的比率とを示すものではないのである。」<sup>29</sup>とやっているように、単純な価値形態においては、商品 A は社会的価値関係を特殊個別的な商品 B の使用価値によってしか表現されておらず、価値の総社会的性格、すなわち抽象的人間労働という全ての人間に共通する人間労働一般の対象化された価値表現としては不十分な表現形態である、というのである。

したがって、商品 A としては、自己を他の一切の商品と関係させ、それらを等価値形態に立たせ、自己との直接的交換可能性の位置につかせ、自らは相対的価値形態に立って、価値表現することとなる。かくして「その商品の個別的な価値表現は、それぞれの異なった単純な価値表現のいくらかでも延長され得る列に転化する。」<sup>30</sup>

リンネル20エレ＝	上着1着
	茶10ポンド
	コーヒー40ポンド
	小麦1クォーター
	金2オンス
	鉄1/2トン
	その他

「全体的な価値形態」への「単純な価値形態」の転化のエネルギー源は価値実体の抽象的人間労働である。実体とその表現形態との矛盾がより実体に即した表現形態へと発展させたのである。

岩井は、このマルクスの論理に「循環論法におい」<sup>31</sup>があるという。すなわち「労働価値論を前提として商品世界の貨幣形態をみちびき、商品世界の貨幣形態をとおして労働価値論を実証するという論法である。」<sup>32</sup>という。「労働価値論を前提して商品世界の貨幣形態をみちびく」ということは、まさにそのとおりである。しかし「商品世界の貨幣形態をとおして労働価値論を実証する」とは、マルクスのどこにそれが書かれているのか。

労働実体の物的表現としての「価値形態」が、「貨幣形態」においてまさに「価値概念に対応」したものであることは否定しえない真理である。しかし価値形態の展開において論証すべき貨幣形態を前提し、それとの比較で価値形態を展開したり、価値形態の展開過程で前提としている労働価値論を実証しようとするなどと、いわれなき「循環論法」を持ち出すとは不可解なことである。岩井は、貨幣形態はまさに「循環論法」によってのみ明らかにされると自ら考えて



いることを正当化するための、いわばマルクスに対する「ほめごろし」である。

岩井は言う、「しかしながら、『循環論法』それ自体は必ずしも絶望すべきものではない。いや、これからわたしが示していこうとおもうのは、『貨幣形態』にもし『秘密』があるとしたら、それはこの貨幣形態を固有の価値形態とする商品世界がまさに『循環論法』によって存立する構造をしているということなのである。それは同時に、貨幣という存在が、商品世界におけるまさに『生きられた循環論法』にほかならないということを示すことにもなるのである。」<sup>33</sup>と。

岩井の循環論法的貨幣形態論は後にその誤謬を明らかにすることとして、いまこの「全体的な価値形態」への「単純な価値形態」の転化についてのマルクスの論理については、岩井は以上の疑問を投げ掛けているに過ぎない。したがって、われわれは、最も議論のある、不可解とされている「一般的な価値形態」への「全体的な価値形態」の転化の論理に移行しよう。

## 5. 「一般的な価値形態」への「全体的な価値形態」の転化についてのマルクスの論理

マルクスは、「全体的な価値形態」においても3つの欠陥があって不十分な価値表現形態であると言っている。その欠陥とは、①「その表示系列がいつになっても終わらない」こと、②「それは崩壊しがちな雑多な種類の価値表現の色とりどりの寄木細工をなしている」こと、③「あらゆる商品の相対的価値形態は、すべての他の商品の相対的価値形態と異なった無限の価値表現の序列である」こと、の3つであるという。<sup>34</sup>

これらの欠陥は、価値実体とその表現形態との矛盾、またはその不十分性とどのような係わりがあるのであろうか。①の欠陥は、果たして欠陥と呼べるものであろうか。この形態はまさに単純な価値形態における不十分性を克服した結果としての形態であって、相対的価値形態に立つ商品の価値はあらゆる商品の使用価値によって表現され、あらゆる商品を直接的交換可能性の位置に据えたのであるから、単純な価値形態の不十分性を克服したことになる。相対的価値形態に立つ商品の価値表現が例え永遠に続こうとも、それはただその価値表現の社会性が拡大して行くに過ぎない。しかし今ここで考察している抽象的モデルの世界においては、時間的経過によって次から次へと生成する商品種については論外に置かなければならない。今無いものを論ずるわけにはいかないからである。

②の欠陥はどうであろうか。「崩壊しがちな雑多な種類の価値表現」とはどういうことなのであろうか。全体的な価値形態がなぜ「崩壊しがちな」ものなのだろうか。相対的価値形態に立つ商品と等価形態に立つ他のすべての商品との関係は、ただ一つの商品がそれだけで、他の全ての商品を自己の価値の表現手段としてかつてに等価形態に立たせ、直接的な交換可能性あるものとして措定した、極めて個別的で特殊な行為によって成立した不安定な関係である、ということなのであろう。とするならば、この個別的特殊的行為によって成立した「全体的な価値形態」は、商品世界における総社会的価値体系、すなわち抽象的人間労働による価値関係という共通の総社会的関係が表現されていない、ということである。なぜならば、等価形態に立たされている他の全ての商品は、何ら自己の価値を表現しているわけではなく、ただそれ自身の自然形態で、何ら総社会的関係もなく、単なるある一商品の価値表現の材料として措定されたに過ぎないからである。マルクスが次のように言っていることはこのことをいっているのである。すなわち「人間労働は、その完全なまたは総体的な現象形態を、かの特別な現象形態の

総体的広がりの中にもってはいるが、なんら統一的の現象形態をもたない。」<sup>39</sup>と。したがって、この第2の欠陥は価値実態とその表現形態との矛盾または不十分性を指摘する要因としては容認されうるものであろう。

③の欠陥はどうであろうか。これは商品の数だけ「全体的な価値形態」がある、ということであって、ほとんど意味をなさないものである。

以上の考察から、「全体的な価値形態」に対してマルクスが指摘した3つの欠陥から、第2の欠陥だけを取り出し、それを次への論理展開の飛躍の要因とするならば、どうすればよいのだろうか。それは、商品が総社会的価値関係の存在であるとすれば、これまでの価値表現形態における「私事」を捨て、相互に「協力」し、「共通の仕事」<sup>40</sup>として「統一的に」価値表現しなければならない。それは、すでに「単純な価値形態」で指摘したように、その価値関係は「逆の関係」をも含んだものとして存在しているのであるから、「全体的な価値形態」において「特別な等価形態」に立たされている諸商品は相互に協力し、共同した統一的総社会的事業として、「逆の関係」を展開しなければならないのである。すなわち次のように。

上着1着	=	}	リンネル20エレ
茶10ポンド	=		
コーヒー40ポンド	=		
小麦1クォーター	=		
金1オンス	=		
鉄1/2トン	=		
A商品x量	=		
その他の商品	=		

この価値形態において初めて諸商品は、価値実態とその表現形態との矛盾、すなわち価値実態の持つ総社会的関係とその価値表現における私的な個別性との矛盾を解決したことになるのである。この価値形態についてマルクスは次のようにその矛盾の解決したことを宣言する。

「新たにえられた形態は、商品世界の価値を同一なる、この世界から分離された商品種で表現する。例えばリンネルで。そしてすべての商品の価値を、かくてそのリンネルと等しいということを示すのである。リンネルに等しいものとして、あらゆる商品の価値は、いまやただそれ自身の使用価値から区別されるだけでなく、一切の使用価値から区別されるのである。そしてまさにこのことによって、この商品とあらゆる商品とに共通なるものとして表現される。したがって、この形態にいたって初めて現実に商品を、価値として相互に相関係させ、またこれらを相互に交換価値として現れさせるようになる。」<sup>41</sup>と。

すなわち、総社会的価値関係が統一的に表現されたこの形態は「一般的価値形態」であり、それは、価値実態である抽象的人間労働という超歴史的な性格の特殊歴史的な社会的表現でもある、とマルクスは次のように言っている。

「労働生産物を無差別な人間労働の単なる凝結物として表示する一般的価値形態は、それ自身の構造によって、それが商品世界の社会的表現であるということを示すのである。このようにして、一般的価値形態は、この世界の内部で労働の一般的に人間的な性格が、その特殊に社会的な性格を形成しているのを啓示するのである。」<sup>42</sup>と。

以上のように明かされたマルクスの論理において一貫していることは、価値実体とその表現形態との矛盾の解決という弁証法的論法である。価値実体としての抽象的人間労働または一般的人間労働という概念は通底概念として保持され、その表現形態においては最も単純な、未熟なものではあるが本質的なものから出発し、最後に熟成した現実形態へと上向していくのである。その論理の展開にあって、不明瞭で、かつまた不必要な冗長した説明もありはしたが、少なくとも、論証すべき熟成した形態ないし発展した形態を前提に、その前段階の未熟な形態の必然性を論証するなどという循環論法はとってはいない。

岩井は、「全体的な価値形態」と「一般的な価値形態」は相互の前提しあう関係であるという循環論法こそが、「貨幣形態の謎」に迫る唯一の方法であると強弁するのであるが、そのような論法が、宗教的信仰の世界ならいざ知らず、合理的な近代科学の世界で通用するとも思っているのか。それともマルクス経済学に対する「ほめごろし」の武器として使用しているのか。それはともかく、岩井の循環論法を吟味してみよう。

## 6. 岩井の「循環論法」

岩井は、マルクスの「全体的な価値形態」から「一般的な価値形態」への移行の論理を「じつにあっさりとしたもの」(39)としてあまり吟味していない。それは、マルクスが「全体的な価値形態」を「逆関係」としてただひっくり返したただけのものという捉え方をしているからである。また彼はそれはそれで当然であって、なにも「深遠な解釈など必要としない『問題』ならぬ『問題』なのである。」(40)と言って、「従来のマルクス解釈者」を嘲笑し、彼の移行の論理を展開してみせる。

「ひとつの商品リンネルをかんがえてみよう。そして、なんらかの理由で、このリンネルにかんしてすでに全体的な価値形態が成立していると想定してみよう。重要なのは、ここではなぜリンネルが全体的な相対的価値形態であるかという交換過程論的な問いを発してはいけないということである。(この問いを発すると、商品所有者の主観的欲望の拡大という契機を導入して価値形態論を解釈しようとする宇野弘蔵になってしまう。)どのような理由であれ、リンネルがほかのすべての商品にそれぞれじぶんとの直接的な交換可能性をあたえているという純粹に思考実験的な想定から出発するのである。」(41)と、まず前置きをし、続いて岩井流「循環論法」を展開してみせる。

ところで、この「前置き」に多少問題点がある。「どのような理由であれ云々」といながら価値形態論は「主観的欲望」を導入する問題ではないと宇野弘蔵を批判しているが、それはそれで正しいのでそれでよいのであるが、「どのような理由であれ云々」は正しくない。マルクスの論理の基底にはしっかりと抽象的人間労働という人間労働一般が捉えられており、それを「理由」として「全体的な価値形態」も「一般的な価値形態」も成り立たせているのである。ここにその「理由」を無視して「全体的な価値形態」を措定するのは、全くア・プリオリな措定であり、岩井がすでにここにおいて「労働価値論」を無視し、自己流の「循環論法」を展開しようとする試みが見えてくる。

そして彼は続けて言う。「そうすると、とうぜん、上着もお茶もコーヒーも小麦も金も鉄も、それぞれがリンネルと直接に交換可能な存在になる。したがって、今度は逆に、上着もお茶も

コーヒーも小麦も金も鉄もそれぞれ同時にリンネルにたいしてじぶんと直接的な交換可能性をあたえることができることになる。これはもちろん可能性として（そして、あくまで可能性として）一般的な等価形態となることを意味している。」(42)と。

初めの「そうすると、」から「存在になる。」までのセンテンスは全くナンセンスである。というのは、無内容なあの「前置き」ですでに「全体的な価値形態」が成立していると想定しているのであるから、ここで、特別な等価形態に立たせられている「上着もお茶もコーヒーも小麦も金も鉄も」リンネルの「直接的な交換可能な存在になる」という言い方はできない。というのは、岩井は「価値形態論がすでになんらかの意味で価値体系が成立している商品世界をその分析の対象にしていることを念頭にいれ」(43)、そして商品の持つ論理性を展開することなく、「全体的な価値形態」を「純粋に思考実験的な想定から出発」しているのであるから、「上着もお茶もコーヒーも小麦も金も鉄も」リンネルの「直接的な交換可能な存在になる」のではなく、「全体的な価値形態は、リンネルが、上着、お茶、コーヒー、小麦、金、鉄、その他の商品を直接的な交換可能な存在にしている価値形態である」と、思考実験的なモデルを商品世界から抽出したに過ぎない言い方をしなければならない。

したがってそこには少しも論理性がないのであるから、「一般的な価値形態」においてもその価値形態は、「上着、お茶、コーヒー、小麦、金、鉄、その他の商品が、リンネルを直接的な交換可能な存在にしている価値形態である」と、全く同じようにただ商品世界からの思考実験的なモデルを抽出して並べ置いただけの平板な言い方しかできないはずである。それらの価値形態においては何らの論理的な関連はないのである。ところが岩井は、相対的価値形態と等価形態にあるそれぞれの商品を、全くマルクスの言う「逆関係」だけを持ち出してきて、ひっくり返し、岩井流「循環論法」なるものを誇示している。しかもこの「循環論法」なるセンテンスを、6回もしつこく繰り返すのである。(44)

岩井流「循環論法」とは、二つの形態、すなわち、「全体的な価値形態」と「一般的な価値形態」を同時並列的に並べ、「一般的な価値形態」を「全体的な価値形態」の前提とし、「全体的な価値形態」を「一般的な価値形態」の前提とした、いわゆる「宙吊り」の論理である。それは、「 $A=B$ であるのは、 $B=A$ であるからであり、 $B=A$ であるのは、 $A=B$ であるからである」ということであり、岩井はそれをしつこく繰り返しているに過ぎないのである。

このような子供だましの幼稚な論理を「価値形態論」に適用し、これこそが「価値形態論」の真髄であるかのごとく岩井は強弁する。「貨幣形態を固有の価値形態とする商品世界がまさに『循環論法』によって存立する構造をしている」、とか「貨幣という存在が、商品世界におけるまさに『生きられた循環論法』にはかならない」(45)と述べ、「そして最後に捨てられるのは労働価値論である。」(46)と。

この岩井の、マルクス経済学における労働価値論を葬りさろうとする「循環論法」が、社会科学的に正当性を持てるものなのか。労働価値論が社会科学的に全く誤謬であるとするならば、それはそれでよい。そうであれば、それをきちんと論証しなければならない。岩井流「循環論法」を持ち出してきて、論証したつもりでいること自体、論証したことにならず、むしろ労働価値論の社会科学的正当性を立証したようなものではないのか。

そこでさらに岩井の労働価値論なき「貨幣形態」論を吟味してみよう。

7. 岩井の「貨幣形態の循環論法」

マルクスは、「一般的な価値形態」における等価形態にある一般的等価物が「終局的にある特殊な商品種に限定される瞬間から、初めて商品世界の統一的相対的価値形態が、客観的固定性と一般的に社会的な妥当性とを得」(47)るのであって、「この特殊な商品種は、等価形態がその自然形態と社会的に合成するに至って、貨幣商品となり、また貨幣として機能する。」(48)と述べ、その貨幣商品とは、「歴史的に占有した」(49)ところの「金」である、として、貨幣形態を提示する。すなわち、

リンネル20エレ	=	}	金 2 オンス
上着 1 着	=		
茶10ポンド	=		
コーヒー40ポンド	=		
小麦 1 クォーター	=		
鉄 1 / 2 トン	=		
A 商品 x 量	=		

したがって、この「貨幣形態」と「一般的な価値形態」とは本質的に何ら異なるものではなく、その関係は、抽象的な論理的形態である「一般的な価値形態」を歴史的な現実の商品経済社会における「貨幣形態」に向上転化しただけのものなのである。純粹に論理的モデルの世界は「一般的な価値形態」のままである。したがって、「金」が何故に貨幣商品の地位を得たか、などという問いは、金の自然的属性（例えば、展性、延性が極めて高く、熱の良導体であり、空气中、水中で極めて安定的で、酸化剤によっても酸化されず、酸やアルカリにも溶けない、等）を問題にする問いであって、それは価値形態論にあっては枝葉末節の問題である。

しかしそうした金の自然的属性が人間社会における多用途性を備えるに至って商品となる。その商品の特性は、①労働生産物としての価値体であり、②使用価値として耐久性を持ち、③分割結合が容易で、しかも品質は均一・不変性を持ち、④運搬・保管が容易であり、⑤腐食による減耗の恐れはない、等の性質を持っており、商品流通上の利便性が優れて高いため、金は貨幣商品の地位を与えられたのである。しかしここで錯覚をおこしてはいけない。すなわち、「金と銀はほんらい貨幣ではない」ということ。金と銀はその自然的属性によって使用価値を持ち、それによって商品となり、金・銀商品がその利便性によって独占的に貨幣となったのである。したがって「貨幣はほんらい金と銀である。」(50)と言うことである。

この現実の商品世界において諸商品は、相互に「協力」し、社会的行為としての「共同の事業」として「金」に一般的等価物の地位を与えたのである。マルクスはこのことについて、第2章の「交換過程」のところで次のように強調している。「ただ社会的行為のみが、一定の商品を一般的等価となすことができるのである。したがって、すべての他の商品の社会的行動が一般的にその価値を表示する一定の商品を除外する。」(51)と。

このマルクスの「貨幣形態」論に、「循環論法」を適用し、「貨幣形態」を逆さまの「宙吊り」にして、労働価値論を叩き落とそうというのが岩井の論法である。

岩井は言う、「いままでの議論はすべて、リンネルという商品を例にとった純粋な思考実験のなかの話であった。だが、もしほかのすべての商品にたいして同時に直接的な交換可能性をあたえたとともにほかのすべての商品によって同時に直接的な交換可能性をあたえられている商品が現実存在しているならば、もちろん、それは言葉の真の意味での『貨幣』にほかならない。貨幣とは、全体的な相対的価値形態と一般的な等価形態というふたつの役割を商品世界のなかで同時に演じている。いや演じさせられている存在なのである。」52と。

岩井は、貨幣形態を述べる時も同様に、「全体的な価値形態」と「一般的な価値形態」を同時並列的に並べ、前者における相対的価値形態と後者における等価形態にただ現実の貨幣を当てはめ、次に示す「貨幣形態」によって例の「循環論法」を開陳する。

<Z 貨幣形態>

20エレのリンネル	=			=20エレのリンネル
1着の上着	=			=1着の上着
10ポンドの茶	=	8ポンド・	8ポンド・	=10ポンドの茶
40ポンドのコーヒー	=	スターリング	スターリング	=40ポンドのコーヒー
1クォーターの小麦	=	の貨幣	の貨幣	=1クォーターの小麦
半トンの鉄	=			=半トンの鉄
2オンスの金	=			=2オンスの金

「ひとたび無限の『循環論法』としての貨幣形態Zが成立してしまうと、貨幣という存在はまさにその『循環論法』を現実として『生き抜く』存在となる。それは、ほかのすべての商品に直接的な交換可能性をあたえることによって、ほかのすべての商品から直接的な交換可能性を与えられ、ほかのすべての商品から直接的な交換可能性をあたえられることによって、ほかのすべての商品に直接的な交換可能性をあたえている。」53と。

岩井が「ひとたび無限の『循環論法』としての貨幣形態Zが成立してしまうと、云々」と言っているが、これは岩井がかってに「全体的な価値形態」と「一般的な価値形態」とを同時並列的に並べ、そこには何の脈絡もなく、一方と他方を「逆の関係」に置き替えただけの価値形態に、「8ポンド・スターリングの貨幣」を押し付け、「一方は他方の前提であり、他方は一方の前提である」という岩井流「循環論法」を開陳しているに過ぎないのである。しかもこの「貨幣形態Z」においては、「2オンスの金」商品が貨幣商品という地位についていないのである。

「純粋な思考実験」のモデルとして抽出されたこれまでの「価値形態」のモデルを無視して、一体どこから「8ポンド・スターリングの貨幣」になるものを持ち出してきたか。「純粋な思考」どころか、はなはだ「不純な思考」を見る思いである。

岩井の「貨幣」は、「金」を一般的等価物としたマルクスの貨幣形態における「貨幣」とどこが違うのか？ 一体、岩井の「貨幣」とは何か？ 何も説明がない。ただ先の引用文の「もしほかのすべての商品にたいして」から「商品が現実存在しているならば」における商品を「貨幣」と言っているのであるが、その「商品」とは、「いままでの論議」におけるモデルにおいて何を指して言っているのか。それは「いままでの議論」の外にある商品で、「空」を掴むものである。もっとも岩井にとっては「空」であっても構わないのであろうが、彼は具体的事例として「8ポンド・スターリングの貨幣」を外部から持ち込んで来たのであるから、それでは、マルクス

が「純粋な思考実験」モデルとしての「価値形態」で明らかにしようとした「商品は、いかにして、なぜ、何によって、貨幣であるかを理解すること」64はできない。岩井の「貨幣」とは、岩井の次なるセンテンスによってまさに「空」的存在であることが分かる。

「じっさい、この『循環論法』のなかには、貨幣として機能している商品の生産のために投入されるひとびとの社会的な労働、貨幣として機能している商品にたいしてひとびとがいだく主観的な欲望、さらにはある商品の貨幣として強制的に使わせることになる共同体の申し合わせや君主の勅令や市民のあいだの契約や国家による立法といった外部的な要因はいっさいはいりこむ余地はない。——貨幣という存在は、まさにみずからの存在の根拠をみずからで宙づりのつくりだしている存在なのである。」65と。

すなわち、岩井の「貨幣」とは、①価値体でない、②使用価値を持たない、③価値章標でないなどの存在であるという。ではどのような存在か？それは「宙づりの存在」である、という。まさに摺みどころのない「空」的存在である。

しかしこの論法にも、論理矛盾がある。まず、岩井は、先に引用した「もしほかのすべての商品にたいして云々」のところで、ある「商品」を「貨幣」と言っているのであるから、価値体でもなく、使用価値もなく、価値章標でもない「商品」とは何か？その「商品」が「もし——ならば」という仮定法による「循環論法」で「貨幣」の地位についているのであるが、マルクスの問いであるその「商品は、いかにして、なぜに、何によって、貨幣であるか」を説明しなければならない。しかし岩井はその問いに対して、「貨幣が貨幣であるのは、それが貨幣であるからなのである。」66と答え、岩井流の「宙づり循環論法」で済ましていくけれども、無能者の権威主義を真似て、学問の「科学性」を嘲笑してはいけない。

## 8. 「鑄貨、紙幣、エレクトロニック・マネー」の流通の根拠は何か？

岩井は、「貨幣」が「空」的存在であってもいっこうに差し支えないものとして、「鑄貨、紙幣、エレクトロニック・マネー」を例として次のように言っている。

「貨幣という存在は、貨幣形態Zのなかで貨幣の位置を占めつづけていることさえできれば、それ自体が実体的な価値をもつ商品である必要はいっさいない。まして、それは金という特殊な商品である必要もない。均質的であり、分割可能であり、耐久的でありさえすれば、どのようなモノ、いやどんなものでも貨幣になりうるのである。貨幣単位を刻印されたなんの役にもたない一枚の紙切れでも、さらにはコンピューターの記憶装置に電磁気的に書きこまれた貨幣単位の情報コードでも、貨幣として社会的にみとめられていさえすれば貨幣としての機能をはたすことになる。それが、いわゆる鑄貨であり、紙幣であり、エレクトロニック・マネーにほかならない。」67と。さらにその「貨幣」を「純粋化」して、続けて言う。

「そして、どんなものであれ、商品としてはまったく無価値なモノが無限の『循環論法』を生き抜く貨幣の地位を占めるようになったとき、われわれの貨幣形態Zはそのもっとも純粋な形態に到達することになる。」68と。

まずこの岩井の「貨幣」がどのような性質のものかは、おおよそ見当がついたのであるが、それでもこの論理には説明するものがない。まず、岩井は、「貨幣」は「実体的な価値をもつ商品である必要はいっさいない。まして、金という特殊な商品である必要もない。」と断言してい

るが、それはそれでよいとして、そのすぐあとに、「均質的であり、分割可能であり、耐久的でありさえすれば」という「貨幣」の必要条件をつけている。そのような必要条件をそなえた「モノ」とはどのような「モノ」か。そのような「モノ」が商品世界のなかにあるとすれば、金または銀などの貴金属以外存在しない。しかし岩井は、「一枚の紙切れ」、「鑄貨」「紙幣」、「エレクトロニック・マネー」を上げている。しかしそれでもまた岩井は、これらの「貨幣」に対してもその必要条件をつけている。「貨幣として社会的に認められていさえすれば」というように。

「貨幣として社会的に認められ」る「モノ」とは、どのような「モノ」でなければならないのか。つまり、「一枚の紙切れ」にしろ、「鑄貨」にしろ、「紙幣」にしろ、「エレクトロニック・マネー」にしろ、いずれも「商品としてはまったく無価値なモノ」であろう。しかしながら、それら「商品としてはまったく無価値なモノ」が貨幣として流通するためには、岩井がいみじくも述べているように「社会的認知」が必要なのである。それは、商品語だけの商品世界では不可能である。なぜならば、「商品語」の商品世界は、「純粹思考的な実験」モデルの世界であり、そこには使用価値のない無価値な商品は存在していないからである。とすれば、岩井が自ら繰り返し導入しないように注意をうながした、あの「人間語を話す宇野弘蔵の世界」を導入し、市民社会の契約や、国家による強制通用力や、信用制度を問題しなければならないであろう。

それらの無価値な「貨幣」が流通するためには、時代的時期的にいても、地域的場所的空間的にいても、特殊的であり、限定的であって、普遍性がないのである。ポンド・スターリングが日本の商品市場で一般的に流通している話は聞いたことがない。ドルでさえ日本国内で一般大衆が通常の買物をしているなどと聞いたことがない。岩井はペソ、リラ、ウォン、ルーブルなどの紙幣で日常的な買物をしているのだろうか。それらが流通する条件は限定され、流通圏に限られている。ある個人がサインした無価値な「一片の紙切れ」が「貨幣」として流通するためには、彼自身の「信用」が「社会的に認知」されていることが条件である。その「信用」とは、その無価値な「一片の紙切れ」が必ず価値ある「モノ」に転化すると社会的に信用されていることである。「信用」がなければドルでさえ流通しなくなる。

「紙幣」や「鑄貨」が歴史的変遷とともに廃棄と再生を繰り返してきた背景に、市民及び国家社会の崩壊と再生による信用の変動があったからである。しかしそうした変動にもかかわらず、商品経済の基底に普遍的に流通してきたものが貨幣としての「金および銀などの貴金属」であった。無価値な「貨幣」が普遍的に流通してきたためしはなかった。

今、ここで「価値形態論」を展開し、最終の論理的段階における「一般的な価値形態」から「貨幣形態」への移行に際する「現実の一般的等価物」という場合の「現実」という修飾語は、歴史的に実在する商品世界を抽象した「思考実験的な」モデルから、再び歴史的事存の商品世界へと上向して、抽象モデルに適合する具体的な現象形態を把握した内容を指すのである。もし、その歴史的事存の商品世界を抽象し、「思考実験的な」モデルから岩井流の無価値な「貨幣」を論証しようとするなら、そのモデルのなかに無価値な「モノ」を設定しておく必要がある。「無から有が生まれているのである。」(p.67)などと詭弁を弄してはいけない。



9. おわりに

最後にここで言っておきたいことは、「铸貨」「紙幣」などの流通は、「貨幣機能論」で取り上げるべきものであって、商品の価値表現形式を論じる「価値形態論」の問題ではない。論理次元の異なる諸要素を持ち出してきて、独りよがりの「循環論法」を展開して勝ち名乗りを上げている岩井の精神構造は、学問とはほど遠い偏狭な権威主義に凝り固まった詭弁家の臭いがしてならない。

注

- (1) KARL MARX, "DAS KAPITAL" I. DIEZ VERLAK, BERLIN, 1962. S.62. 向坂逸郎訳, 岩波文庫 (一), p.95.
- (2) 岩井克人著『貨幣論』筑摩書房, 1994. 4.
- (3) 同上, p.43.
- (4) 同上, p.23.
- (5) 同上, p.23.
- (6) MARX, *ibid.* SS. 58-61. 向坂, p.87-92.
- (7) *ibid.*S.65. 向坂, p.101.
- (8) *ibid.*S.64. 向坂, 98.
- (9) *ibid.*S.65. 向坂, p.100.
- (10) *ibid.*S.63. 向坂, p.97.
- (11) *ibid.*S.67. 向坂, p.104.
- (12) *ibid.*S.70. 向坂, p.109.
- (13) *ibid.*S.63. 向坂, p.96.
- (14) *ibid.*S.71. 向坂, pp.111-112.
- (15) 岩井, 前掲書, p.39.
- (16) 同上, pp.36-37.
- (17) MARX, *ibid.*S.67. 向坂, p.104.
- (18) 岩井, 前掲書, p.40.
- (19) MARX, *ibid.*S.71. 原文では, "Quidproquo". 向坂, p.111.
- (20) *ibid.*S.71. 向坂, p.111.
- (21) *ibid.*S.70. 向坂, p.110-111.
- (22) *ibid.*S.70. 向坂, p.111.
- (23) *ibid.*S.70. 向坂, p.110.
- (24) *ibid.*S.70. 向坂, p.111.
- (25) *ibid.*S.70. 向坂, p.111.
- (26) *ibid.*S.72. 向坂, p.113.
- (27) *ibid.*S.72. 向坂, p.113.
- (28) *ibid.*S.72. 向坂, p.114.

- 29 ibid.S.76. 向坂, pp.120-121.  
 30 ibid.S.76. 向坂, p.121.  
 31 岩井, 前掲書, p.42  
 32 同上, p.42.  
 33 同上, p.42  
 34 MARX, ibid.S.78. 向坂, p.125.  
 35 ibid.S.79. 向坂, p.125.  
 36 ibid.S.80. 向坂, p.129.  
 37 ibid.S.80. 向坂, p.128.  
 38 ibid.S.81. 向坂, p.130.  
 39 岩井, 前掲書, p.45.  
 40 同上, p.46.  
 41 同上, pp.46-47.  
 42 p.47.  
 43 同上, p.46.  
 44 同上, p.51, p.52-53, p.53, p.54, p.55, p.57.  
 45 同上, p.42.  
 46 同上, p.43.  
 47 MARX, ibid.S.83. 向坂, p.134.  
 48 ibid.S.84. 向坂, p.134.  
 49 ibid.S.84. 向坂, p.134.  
 50 ibid.S.104. 向坂, p.171.  
 51 ibid.S.101. 向坂, p.166-167.  
 52 岩井, 前掲書, p.54.  
 53 同上, p.55.  
 54 MARX, ibid.S.107. 向坂, p.174.  
 55 岩井, 前掲書, pp.55-56.  
 56 同上, p.64.  
 57 同上, p.64-65.  
 58 同上, p.65.

### 参 考 文 献

- 宇野弘蔵『経済原論』岩波書店, 1966.  
 宇野弘蔵『価値論の研究』東京大学出版会, 1967.  
 宇野弘蔵『価値論』青木書店, 1968.  
 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店, 1968.  
 鈴木敏紀『経済発展と地域開発の理論』耕文堂書店, 1992.

## Things to be Solved on The Theory of Form of Value

—Criticism on Katsuhito IWAI's "The Theory of Money"—

Toshiki SUZUKI\*

### ABSTRACT

Marx unfolded the theory of form of value in his "Capital", and he proved the necessity of money there. When he proved it on the theory of form of value, he used the concept of abstract human labour as general human labour which is the substance of value of commodities. It was necessary and basic concept for the theory.

Katsuhito Iwai examines the logic of necessity of money parallel to Marx's logic of form of value in his "The theory of Money", and he throws away the concept of abstract human labour. And he finally throws away the theory of value of labour.

The characteristic of Marx's theory of form of value is in harmony between substance and forms of value, and method of dialectic ascent. By the method he proved "the necessity of money". But Iwai proves "the existence of money" by the method of circular argument hanging in midair, arranging forms in a row without substance of value. Both the methods and the contents of proving money are different.

Iwai's method of proving money, that is circular argument, is not scientific method at all. Nevertheless he says that the method of circular argument hanging in midair is the only one to prove the mystery of money. And he emasculates the theory of form of value which is in harmony between substance and forms of value.

Iwai finally says, "What came from nothing is money. Existence came from nothing." He does not know the proverb that "Nothing comes from nothing."

---

\* Division of Social Studies